



Title	哲学カフェって何?
Author(s)	鷲田, 清一
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1997, 1, p. 107-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81721
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔海外事情〕

哲学カフェって何？

鷲田清一

パリでいま、賛否こもごも、ずいぶん話題になっているのが、いくつかのカフェで週一回催される「カフェ・フィロ」という集いである。「フィロ」というのはフィロソフィーのフィロであり、つまりは哲学カフェというわけだ。カフェに三々五々集まり、とくに身分を明かすこともなく、ファーストネームで呼びあい、哲学のディスカッションをするのだ。テーマは死、暴力、愛の残酷さ、核実験……とさまざま、その場で決める。この哲学カフェを主宰している哲学者マルク・ソーテは、別に「哲学相談所」も開設しており、『フィロ』というニューズレターも発行している。

こうした試みの原型は八〇年代のドイツにあった。一九八一年にゲルト・B・アヘンバッハという哲学者がケルン市の近くで「診療所」（プラクシス）を開き、哲学カウンセリングをはじめたのだ。プラクシス（Praxis）というドイツ語は「実践」とともに「医院」をも意味する。この哲学的実践＝哲学医院の試みはしだいに多くの共鳴者を見だし、翌八二年にはドイツ哲学的実践協会が結成される。そして八七年には「アゴラ」という学会誌の発行も開始した。この試みはその後、オランダからパリへ、イスラエルから米国、ノルウェー、南アフリカへと広がっていった。昨年は『応用哲学ジャーナル』が哲学カウンセリングの特集号を組んでもいるし、先のマルク・ソーテの報告『ソクラテスのためのカフェ』の邦訳も出た。

哲学といえば、日本では、なにかむずかしい漢字だらけの思考というイメージがあって、抽象的でとっつきにくいものという印象が強い。だから哲学者にカウンセリングを受ければ、悩みはあっさりこじれ、気分は落ち込むどころか陥没してしまうのではないかと不安がられるのは、たぶん目に見えている。

ところが他方で、時代の困難はとても「哲学的」になりつつある、そんな感触がある。民族紛争、環境汚染、臓器売買、遺伝子レベルでの生命操作、老人

介護、失業、性差別、セクシュアリティの変容、宗教的狂信、アルコール依存症、家族の危機、公共性の再構築などというふうに、自然との関係、人びとの共存、そして「生きがい」やアイデンティティといった個人の支えとなるものをめぐる、そのもっともベーシックな次元で、解決の道筋がにわかには見えないような難問を突きつけられていると言っている。〈わたし〉とはだれか、倫理とは、国家とは、民族とは、性とは、老いとはなにかという、そのような「哲学的」な問題に、だれもが正面から向きあわずにはすまされなくなっているのだ。

社会のそういう困難を前にして哲学にいったいなにができるのか——これが哲学カウンセリングという、哲学者をアカデミズムの内部からその外部へと連れだす試みを駆りたてている問いである。思考の技法としての哲学が、研究室でひとりで「書く」という行為から他者と「語らう」という場面へと、みずから先祖がえりさせはじめたのだ。先祖がえりというのは、ソクラテスは路上で、あるいは広場で、ひとと言葉のキャッチボールをするばかりで、じぶんでは一冊の著書も遺さなかったからだ。ソクラテスがおこなったのは、他人の言葉を受けとめ、投げかえし、相手がみずからことからの道筋（ロゴス）を見いだすのを助けるという、いわゆる産婆術というものである。哲学カウンセリングの運動はどうもそういう哲学の原点に戻ろうという志をもっているらしい。じっさい、ベルリンでは市の支援も受けながら、哲学者が地下鉄の構内にまるで占い師のように座り、市民のいろんな相談にのっているという。哲学の本質をロゴスを分かちあうこと（ダイアローグ）と考え、会話を社交と教養の基礎と考えてきた西洋社会らしい対応であると思う。

わたし自身はこれを、哲学のなかに「聴く」という契機を回復させる試みという点で注目している。分析でも記述でも主張でも表現でも批判でもなく、聴くという、（あえて矛盾した表現をすれば）ポジティブな受け身という契機がもつ力に着目したいと思うのだ。聴くこと、聴きかえすこと、つまりは言葉をしかと受けとめているというただそれだけのことが、苦しみのなかにあるひとをどれだけ支えうるかを、阪神大震災のあと多くのひとが経験してきたはずだ。あるいは、病院のなかで日々思い知らされてきたことだ。

わたしは昨年、じぶんの職場で、仲間たちとともに《臨床哲学》という試み

をはじめた。医師、看護婦、ソーシャルワーカー、カウンセラー、学校教師ら、他人を「世話」するひとたちが、その現場で、死とは、家族とは、性とは、教えるとは、正しさとは……といった（哲学的な）問いにぶつかるときに、その思考のもたえをともにする作業を、《臨床哲学》ととりあえずよんでいる。シンパシーはもともと「苦しみを分ける」という意味だが、ここではそれを「ともに考える」というかたちでできないかと思ったのだ。

もちろん、じぶんは安全地帯に身を置いておいて、現場に立つひとを後方支援するというのは、ただの言い訳ではないのかという批判はあるだろう。他方、哲学は議論をとおした行為であって、問題を取りだし、解決へという思考の道筋をともにさがしとめる場こそ哲学にとっての現場なのだという再反論もありうる。いずれにせよ、哲学者としてであれ「時代の子ども」としてであれ、わたしたちは最終的な答えが見いだせるか否かすらさだかではないような問いに身をさらしていることはまちがいない。

カントも言っていたように、哲学を教えることはできない、「哲学する」ことを示すことができるだけだ。が、そうなると、話すこと、聴くこと、考えること、つまりは言葉の力がわたしたちの社会においてもつ意味についてつきつめて考えることをしておかないと、哲学カフェのアイデアを極東のこの地にうまく接ぎ木することはできないだろうと思う。哲学とはなにか、それがいま、「フィロソフィー」の伝統をもたないこの国でようやく問われはじめた。

（集英社読書情報誌『青春と読書』1997年3月号より転載）